097705-000-4

特9-233

宮本武蔵

桃竜斎　梅玉／自講自記

M33

DBS-1640

特1
233

宮本武藏

桃龍齋梅玉 自講 自記

第一席

宮本武藏の傳記を伺ひます……エヽ武藏は眞面二刀流の元祖で浅屋いまして長劍短劍を持つて十字の構へをいたした時には隨分有名なる達人でも之を崩す事が出來ないと云ふ位ひ一体武藏は宮本と名乘りますか之は養子先きの姓で元吉岡と名乘つたのでありまず父を吉岡無二齋と云ひ吉岡流の名人で浅屋座いますデ養子に參つた先きの養父と云ふのは宮本武左術門と云つて之れも亦日本屈指の劍客だソコで武藏は考へました幼少より實父無二齋の太刀筋を敎はつたが養子に往て見れば流儀こそ違うが中々の達人なる養父にも傳授され孰れも捨て難き太刀筋だデ何地も決して優劣のなく覺えて置て損のない事、ケレども人と立合をする時に實父の搦へを遣つて見たり養父の奥儀を顯はしたりする譯には往かん夫に一方を

宮本武藏
山中にて異
人と試合
の圖

捨てゝ一方を立てれば孰れか不孝に當る何とか之れば一工夫いたさなければなるまいと思ひ付たのが即ち武藏の新たなる工夫で所謂眞面二刀流の太刀筋を網出したる濫觴で浮座います長劍には實父の流儀を像ぢり短劍には養父の太刀筋を寫し陰陽の排へを致したのが武藏の得手で浮座います之れは二刀流を遣ひます由來であるが父の吉岡無二齋と云ふのも吉岡流と一派を立てた位な人物だから實に腕前は見揚げたものだ無二齋には二人の悴があつて長男を清三郎と云ひ次男を七之助と云つたデ後に無二齋は藝州廣嶋に於ける毛利侯のお抱へになりましたが未だ此頃は播州姫路の片側に庵を排へ恰とんど隱遁の姿であつた處で此二人の兄弟は全然性質は異つて居て兄清三郎の方は誠に温厚篤實で夫に病身であるが次男の七之助は子供の時から乱暴者で親の言ふ事抔は聞かない程である尤も惡戯をする位の子供だから筋骨逞ましく劍術も父の太刀筋を其儘に遣う位です夫も其の筈七之助と云ふのは即ち武藏の幼なき時の名で浮座います武藏が十五歳の時であつた姫路の城下から一里半ばかりの處に野村

香勝寺と云ふ寺があるソコの住職は無二齋とは俗緣の兄弟だ夫れ故無二齋も余り七之助が武藝にばかり心を傾けて文事には更に頓着しないのでそれでは氣質が荒々しくなるばかり武のみで文を知らなかつたら夫れこそ片輪だと云ふ考へから暫らく七之助を香勝寺へ預け讀書手習を敎ゆて貰うやうに頼んだ素よりと切つても切れぬ俗緣の伯父甥でありますから香勝寺の住職も快よく承諾して七之助は當分香勝寺に逗留の身となりましたなれど父の申付けと云ひ且つは伯父の處へ參る事故別段否むとよろもなく日々讀書に余念なけれど一を聞いて十を悟るの怜悧なる氣象故誠に進みも早い香勝寺も頼まれ甲斐ありと頻りに喜こんで居る茲に又姫路の城下に有馬喜平治と云ふ劍客がありまして家中の者に夫れ〳〵劍術を敎ゆて居る喜平治先生中々山氣のある男ですから腕前は左程ともないが道場の看板は實に太したもの「日下開山劍法開祖有馬喜平治」と雄太にれい〳〵しく書いてある或日の事です七之助は師たり伯父なる香勝寺より一日の暇を貰つて姫路の城下を見物に往つたが爰に一ッの大騒動を引き起

すと云ふ譯まずんはある可からざるの一席……

第一席

七之助は供をも連れず只一人歩行たい方題諸所を見物いたして歩行くと竹刀の音がボン〳〵といたします　七「ハ、ア誰かの道場があると見るな……と音を便りに往て見ると驚いた大した玄關構へでお負けに看板には日下開山劔法開祖有馬喜平治と認めてあつた　七「世の中には隨分高慢臭い奴もあつたものだ書き樣もあらうに日下開山劔法開祖とは何事だ井の中の蛙大海を知らず此奴の腕前は知れたもんだ」と突如腰なる矢立を取出し其金看板へ黑々と棒を引き井の中の蛙大海を知らず日本一の大馬鹿野郎と書いて其傍へ筆者野村香勝寺内吉岡七之助當年十五才と認めましたが其儘プーッと其處を立去り、知らん顔して香勝寺へ歸つて來た夫れに引き換へ有馬の道場の前は全然黑山の樣に人が群つて居る弟子達は何事ならんと出て見ると驚いた看板は墨黑々と棒が引張つてあつて惡口タラ〳〵の事が書いてある早速其赴きを先生に話すと有馬先生もと〳〵度量の足りない人だから大に立腹いたし　喜「無禮な奴だ斯の如きものを其儘に致し置いては此方の名折れ早速手討ちに致し呉れん香勝寺と云へば直に城下から一里半ばかりだ早々小僧を引連れて來いと眞赤になつて腹を立つた弟子達も面白半分に野村香勝寺へ遣つて參り住職に逢つて七之助の惡戯をなせし仔細を物語り是非共引渡して貰ひたひ先生にも大層な腹立だからと云ふ事を詳しく話したので住職も大に驚き使の者を待たして置き七之助に樣子を尋ねて見ると夫に相違ない餘り高慢な看板を書いてあるにより天狗の鼻を挫いて遣らうと思つて爲た事だと平氣で咄しますから住職も七之助の大膽なるに驚いた、ケレども元々教育を頼まれてある事故預り中に此樣事があつてはならんとソコで使の者と一緒に七之助を召し連れ有馬の道場へ參り只管詫を言つたが扨中々聞き入れない是非共手討に致すと云ふ手詰の談判になつた住職も之には殆んど困つて仕舞つた處が七之助は傍でニコリ〳〵と笑つて居る　喜「怪しからん小僧もあつ

たものだ師匠が詫をいたして居る側で笑つて居るといふのは何事だサア モー斯うなれば容赦は出來ない道場へ來い」と七之助を道場へと引き連れて往く、ヲメズ憶せず七之助は道場へ參つて 七「然らば何あつても淆手討に遊ばすんですか 喜「如何にも容赦は出來んに因り其處へ直れ……と七之助を眞中へ座らせ大刀スラリと引き拔いてアワヤ頭は前に落ちんとする此時早く彼時遲くヒラリと体を換したる七之助兼て斯あらんかと懷中に隱し持つたる赤樫の小大刀は吉岡流極意の小大刀で淆座います夫れを取出しピタリと附けたは星眼の位取り其大刀先きがチラ〳〵と喜平治の目先きへチラ附いて眞劍ながらも打込む事が出來ない此奴油斷のならん小僧だと先生も今は一生懸命になつてエヽイ……ヤヽッと氣合を懸て隙を覗つて居る然るに七之助は如何なる隙をや見出しけんヤッと懸けたる氣合と共に喜平治の手元に附け入るよと見る間に忽ちお小手をピシーリ……無二齋が仕込みの腕前ですから子供と雖ナカ〳〵悔られず思はず眞劍ポロリと取落す其隙に乘じて眞向目懸けて微塵になれと打込んだか

ら堪らない腦骨碎け其儘其處に倒れて仕舞つた此有樣を見たる弟子共は大に驚き介抱を致すものもあれば師匠の敵だ逃すなつと七之助を取卷いて大刀を閃かし四方より追取圍くもあり既に危うく見ゑました

第三席

師匠さへ此樣譯ですものう弟子達は何程の事やあらんと七之助は勇氣日頃に百倍し小腕乍らも一方を切り破り客間に居つたる香勝寺の住職をば肩に担ぎドン〳〵表の方へと逃げ出した ×「ソラ師匠の敵だ逃がすな……討ち取れと騒れも追懸ける七之助は一生懸命伯父上の身に誤ちがあつては相成らんと思ひまして一本道の田甫をば韋駄天走りに逃げて行くズルと向ふから槍を立てさへ怒へ召したる立派な侍が此方を指して參つた七「卒爾ながら淆武士樣と見上げてお願ひが座います 侍「何じゃ武士と見懸けて頼むとは……と怒を開て立出でたるは威風凜々たる一人の武士七之助は両手を束へ危難に逢ひし一伍一仆を手短かに物語る 七「覽の

通り敵は那の樣に追懸けて參りますが私しは之より彼等に向ひ切り死を致しますが之れなる伯父たり師たる者をムザ〳〵敵の刃に殺すは殘念の至ゞ何卒暫らく御隱匿下さいますやう武士のお情け幾重にも願ひます

侍「見れば若年ながらも感心なものじゃョ（二人とも拙者が隱匿て遣はそう武士と見込みし其方の胸中感ずべき處がある……と之より七之助並に香勝寺の兩人をば已れの乘つたる駕に隱し知らん顏して參りますと案の通り有馬の門弟等は追取刀で遣つて參り

甲「モシ〳〵御武家樣貴殿の御供の中へ一人は出家一人は未だ年若き前髮立の者がましりは致しませんか

侍「イヤ知らんて……

乙「知らん筈は御座るまい一本道の此田甫確かに見定めて御すす事で御座るゾサア御隱匿に相成つては貴殿も容赦は相成らんぞ早々此處へお出しなさい

侍「是は怪しからん事を御すす武士の一言は金鐵の如し二枚の舌は遣ひ申さん知らんと云へば飽までも知らん……

狼籍なぞいたすに於ては決して此方に於て容赦は相成らんぞ」と供に持たせたる槍を追取り鞘拂ひに及んで

侍「サア吾れを誰とか思ふ肥

後國熊本の城主加藤肥後守清正の家來宮本武左衛門を知らざるか……と

リヤ〳〵と槍を絞いて身拵へに及んだる其有樣鬼神なりとも取挫がんかと思はれます有馬の門弟も此勢ひに膽を冷し

甲「中村氏命あつての物種ね何より命程大切なものはなからうが

乙「左樣〳〵本多氏の仰せの通り那な無法者に出逢しちやア仕方がねい……イヤナニ肥後國熊本の城主加藤肥後守清正の御家來宮本武左衛門殿とやら……

侍「ナンだ嘲弄いたすな此方のヤした通りの口眞似をして容赦相成らん勘辨いたさんぞと槍を振つてヅカ〳〵と進み出たから門弟等は蜘蛛の子を散す如くに四方八方へと逃げ去つた

侍「エヽ弱虫奴等が……と之より武左衛門は兩人の者を覘より出し樣子を聞くと吉岡流の達人吉岡無二齋の伜だと云ふ事を聞き及び幸ひ倦れの世繼とす可き子供もなきにより其足で直ぐ無二齋の庵を訪ね初對面の挨拶も了り終に七之助を養子に貰ひ受ける事に相成り香勝寺住職は後難を慮り諸國修行の爲め行脚に出ましたが圖らずも無二齋は佐々木岸柳の爲めに暗打に逢ひ七之助の宮本武藏が實父の仇討として

諸國修行に出るの物語り一寸一吸いたして伺ひます

第四席

エ、引續いて伺ひます扨其頃道場荒しと異名を取つた佐々木岸柳といふ劍術の達人がありました初めは仔細あつて出羽守義房公の藩中なる野田大膳とやす者から修業をいたしたなれど後には燕返しの工夫をいたし佐々木流と云ふ一流を立てた位だ彼樣な名人であるが如何にも心高慢で已れの武術を鼻に懸け且ツ人の能をねたむと云ふ至つて宜くない癖がある夫れ故何れの藩中でも佐々木岸柳と云つては召抱へ人がない位デ其頃薩州有馬の温泉と云つては大總流行たものでゐ座います武術者など丶云ふ者は老年ると何も若い時の打身が起つて仕ない夫れだものだから多くは有馬へ來て湯治をいたします吉岡無二齋も當時は薩州侯のお見出しに預り軍學師範を致して居るが何も秋から冬へ懸て古疵が病んでならん夫れ故殿樣からお暇を頂き湯治を致して居ると丁度ソコへ參つたのが佐々木岸柳ですナ、コシテも吉岡無二齋といつては中國邊から九州へ懸けては大名人と尊敬されて居る事故岸柳などが參つたところで誰れも相手に仕ないイヤ〳〵しいなア那の無二齋さへ居なければ隨分拙者だつて用ひられる腕前があるんだけれど那奴の居る爲めに飛んだ邪魔になるヨシ丶一ッ仕合を望んでやらう運よく勝てば此方の仕合せ負けた處で左した恥でもないと終に押を太くも無二齋に仕合を望んだケレども中々岸柳抔の及ぶところでない衆人の中でサン〳〵打負けましたにより岸柳は道々の体で亡げだしたがサア負けて見れば猶殘念だと今度は歸國を覗つて終に毛利公ゐ城下はづれに於て卑怯にも鐵砲を以つて打殺して仕舞つた供の仲間も腰が拔けて仕舞ひましたが毎度ヤ上る通り勇士は死まぎは迄は氣の確かな物で報知に因つて走け付けた伜清三郎が參つたときは息も絶々なれど敵は佐々木岸柳だと云ふ事をヤしました、ケレども悲しいかな清三郎は病心の事故迚も敵討に出る事は出來ない據ところなく熊本なる宮本武藏の許へ知らせて遣りましたので武藏の驚き大方ならず領主幷に

發父よりの許しを得て愈々仇討出發の件り……

第五席

武藏の廻國中一番眼ざましい働きを仕たのが箱根山の狼退治で御座います仝じ事でも人間と立合ひをするのなら未だ呼吸が分つて居りますが扨獸物と來たら實に始末に負へない此時一豬に居たのが柔術取りで有名な關口彌太郎です此人は箱根山で鶴かきをして居て強そうな武士と見ると鶴に乘せて箱根の山中へ引き連れ武術の優劣を試むると云ふ中々武道に懸けては熱心な人其鶴昇なる關口先生と知らずに乘つたのが宮本武藏です　鶴夫「ヲイ先生モー此處は箱根の頂上ですせ一吸やらうじやアではせんかい大分今夜は狼が出そうだから狼退治でも遣らかしましやう　武「鶴屋冗談言つちやア往ん急がぬ旅とは云ひ乍ら早く麓まで往て呉れ夜道は更に厭ふ譯ではないが……時にアノ遠吼那りやア狼の友を呼ぶ聲ではないか　鶴「エヘヽヽヽ大きに左樣で　武「冗談言つちやア困るよ狼を待合せるなんて眞平ぴらだぜ　鶴夫でも仕方がねいソラモー二三丈遣つておいでなすつた……コレ〳〵俺れの方へ來ちやア往ねいお武士の方へ往けお武士の方へ處が狼も鶴昇の言ふ事を聞き分けたと見へましてか突如武藏に飛懸つた武藏も猶豫する場合にあらずと思ひ腰なる両刀を拔き放つて切り拂ふ……スルト來るワ〳〵百疋あまりもウヨー〳〵ッと吼へて來ましたから武藏は全然狼に取圍れて仕舞つたケレども仇討と云ふ大事な望のある身故一生懸命にて切拂ひトウ〳〵五十八疋退治で仕舞つたが未だ〳〵跡に四五十疋居る鶴夫は傍に見て居たが　鶴「ヤアお武士大分勞れたと見ゐるナ何れ俺が代つて上げましやうと云ふや否や突然拳固を振りまはして四五十疋の狼を忽ちの間に退治て仕舞つた武藏は之を見て驚きました　武「大方是やア天狗の化身ではあるまいか拳固でもつて四五十疋張り殺す抔ッて……」と呆れて見て居る　鶴「イヤ漸々マア退治て仕舞つたがお武士さんお前さんも中々腕は達者だねい何たい此處で一ッ勝負をして貰ひてい武藏も素より武藝者の事でありますす故強きを見ては猶更ら腕前

を磨きたいと云ふ量見があるから快よく承知して早速仕合ひをして見ると扨御夫には迚も及ばないソコで名乘り合つて見ると宮本武藏關口彌太郎と双方名前も分つたが武藏は實は此時天狗飛切りの術を彌太郎から教はつた其お影でもつて佐々木岸柳に出逢つたとき首尾よく敵を打つことが出來たので彼座います別れを告げて宮本武藏は諸國を廻り敵を迹ねて歩行くと爰に豊前の小倉に於て町道場を開いて居る佐々木勘太夫と云ふのが岸柳に相違ないと云ふ事を探り夫から早速領主へ願ひを上げ愈々灘嶋に於て勝負をいたす事に相成りました此時武藏は櫂を持つて立逢つた抔と云ふ說もありますが之は素より斯な事のあらう筈はなく眞劍を持つて立逢つたに相違ありません爰に首尾克く本望を達したが勝負の模樣は皆樣彼存じの事故略して一先づ結局といたします

十六

宮本武藏 畢

明治三十三年四月八日印刷
明治三十三年四月十三日發行

編輯兼發行者 東京市淺草區黑船町十五番地 瀨山佐吉

印刷者 東京市神田區南乘物町十五番地 大塲沃美

印刷所 東京市神田區南乘物町十五番地 龍雲堂

發行所 東京市淺草區黑船町十五番地 順成堂

不許復製

を磨きたいと云ふ量見があるから快よく承知して早速仕合ひをして見ると扨駕夫には迚も及ばないソコで名乘り合つて見ると宮本武藏關口彌太郎と双方名前も分つたが武藏は實は此時天狗飛切りの術を彌太郎から教はつた其お影でもつて佐々木岸柳に出逢つたとき首尾よく敵を打つことが出來たので御座います別れを告げて宮本武藏は諸國を廻り敵を迹ねて歩行くと爰に豊前の小倉に於て町道場を開いて居る佐々木勘太夫と云ふのが岸柳に相違ないと云ふ事を探り夫から早速領主へ願ひを上げ愈々灘嶋に於て勝負をいたす事に相成りました此時武藏は櫂を持つて立逢つた抔と云ふ説もありますが之は素より斯なる事のあらう筈はなく眞劍を持つて立逢つたに相違ありませんが爰に首尾克く本望を達したが勝負の模樣は皆樣御存じの事故略して一先づ結局といたします

十六

宮本武藏 畢

明治三十三年四月八日印刷
明治三十三年四月十三日發行

編輯兼發行者　東京市淺草區黑船町十五番地　瀨山佐吉

印刷者　東京市神田區南乘物町十五番地　大塲沃美

印刷所　東京市神田區南乘物町十五番地　龍雲堂

發行所　東京市淺草區黑船町十五番地　順成堂

不許復製